

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 19 日現在

機関番号：32302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652101

研究課題名(和文) 変遷パターン・モデルを用いた日本語表現の分析

研究課題名(英文) An Analysis of Japanese Expressions Using Historical-Change-Pattern-Models

研究代表者

小池 康 (Koike, Yasushi)

関東学園大学・経済学部・講師

研究者番号：70334018

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語の依頼表現・可能表現・条件表現・取り立て表現の史的変遷プロセスに関して、累加型・漸減型・共立型・専立型の四つのパターンから成る「変遷パターン・モデル」を基に、そのモデルの適用可能性を諸資料で検証することを通して、複数の言語事象を統一的に説明できる、高度に抽象化された言語変化のパターン・モデルを構築することを目的としたものである。

成果としては、上述の各種表現においては、モデルの適用可能性が高いと推定される傾向が見出された。しかし、現段階は未だ詳細な考察まで完了してゐる段階とは言えず、今後の更なる分析・考察を要する。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to construct a historical-change-pattern-models of Japanese expressions that can account for various change phenomena of Japanese expressions, using four tentative models; cumulative model, diminish model, coexistence model and agreement model, through looking at an applicability of them to illustrations from novels.

As the result, it remains unclear whether these models are plausible since scrutinies are not sufficient yet. But these models could be applicable highly to various changes of Japanese expressions.

研究分野：第一群

科研費の分科・細目：国語学

キーワード：日本語史 日本語学

1. 研究開始当初の背景

日本語の史的研究は、歴史も長く成果も膨大であるが、体系的な枠組み(の構築)を視野に入れた上での研究とは言い難く、多くは語誌レベルの研究や「条件表現」「依頼表現」などのようなある特定の意味を共有する、複数の表現形式を対象とする研究が中心であったと言える。これらの研究では、各研究が相互の言語事象の関連性を考慮しておらず、また当該の語や表現形式の変遷が日本語の体系に与える影響に関する考察も希薄であった。

このような問題意識のもと、本応募者は複数の言語事象を統一的かつ包括的に説明できる言語変化のパターン・モデルを構築することを目標に研究を進めている。

これまでの研究成果としては、博士論文(筑波大学)として提出した『近現代日本語モダリティ副詞の史的変遷に関する研究』(平成16年)がある。これは、『日本語科学』や『計量国語学』といった学会誌に掲載された論文と紀要に発表した論文とをまとめたものである。内容は、明治期から平成までの、いわゆるモダリティ副詞の用法の変遷を扱ったものであり、結果として累加型、漸減型、共立型、専立型の四つの変遷パターン・モデルが導き出された。

この研究は、明治期以降のモダリティ副詞に限定した研究であったが、そこから得られた四つのモデルは他の日本語の事象にも当てはめられるのではないかと考え、その実態を明らかにしようと考えたのである。

2. 研究の目的

日本語史研究の新たな方法論を確立するために、日本語の変遷プロセスを統一的かつ包括的に説明しうる、下記の研究を遂行する。

日本語の史的研究に「変遷パターン・モデル」を導入することにより、日本語のさ

まざまな表現の変遷プロセスを解明する。

さまざまな資料や先行研究に対して「変遷パターン・モデル」の適用可能性を検証することを繰り返すことにより、複数の言語事象を統一的に説明できる、高度に抽象化された言語変化のパターン・モデルを構築する。

3. 研究の方法

<平成23年度>

(1) 文献資料(大衆小説)データベースを援用して、モダリティ表現の変遷を包括的に調査・分析する。

初年度は、推量表現や当為表現などといった、文末に出現しやすいモダリティ表現の史的変遷を明らかにする。文献資料より対象となる形式(用例)を抜き出し、意味・形式・位相等の差異から、どのような変遷プロセスをたどったのかを考察する。

この調査・考察は、博士論文の延長線上に位置づけられるものであると共に、次の(2)にも関わる重要な作業である。なお、使用するデータベースについては(3)で述べる。

(2) 得られた結果に対して、パターン・モデルの適用可能性を検証する。

(1)によって得られた用例群をパターン化し、それを四つのパターン・モデル(累加型・漸減型・共立型・専立型(本申請書類「2. 研究の斬新性・チャレンジ性」参照)と比較検討する。そして、得られた用例群がこれらのどの変遷パターン・モデルと一致するのか、またはどれとも一致していないか、一致していない場合はどこが違うのか、その違いに共通点は見いだせるか、違いに共通点のある場合には新たなパターン・モデルが設定できるか、などを検証し、現象(用例)に即したモデルの構築を念頭に置いて、考察を進める。そして、これらを通してパターン・モデルのさらなる安定化を図る。

(3) 新規に、主に文献資料を中心に収集し、データベースの安定性を高める。

本研究は、特に明治期以降の近現代に限って研究を進めるため、収集する文献も近現代のものを中心に充実を図る。本応募者は、博士論文執筆の際に、主に1900年から2000年にかけての大衆小説(ただし歴史・時代小説は除く)をリスト化し、できる限り書籍(初版本もしくは校正された全集)を入手もしくはコピーするようにしたが、結果的には100作品程度しか入手できなかった。今回、本研究を進めるに当たっては、その際入手できなかった資料をはじめ、特に2000年以降に出版された大衆小説の収集を進め(すでにリスト化は終了済み)最低でも200作品程度まで広げる。また、大衆小説だけではなく、純文学・児童文学・翻訳(文学)といった、大衆文学以外の文学関係の文献リストを作成し、入手を始める。その際、日本文学研究などといった日本語学(国語学)以外の研究分野での成果を踏まえて、文献資料を選定する。さらに、一部の作品はすでにコーパス化したが、できる限り全資料のコーパス化も進める。その際は、学生2名に補助をしてもらう予定である。

(4) 結果をまとめ、書籍化できるよう準備をする。

本応募者の博士論文は未公開であるので、(1)から(3)の結果の内容を加筆修正して、書籍として刊行できるよう、初稿段階レベルにまでまとめる。

<平成24年度>

(1) 先行研究の収集

前年度からの流れで、本応募者の提起するパターン・モデルが、他の研究者によって行なわれたさまざまな日本語表現の変化・変遷研究の成果とどのようにリンクする(しうる)のかを検証する。具体的には、下記の諸研究を取り上げる。

(a) 依頼表現の変遷：工藤真由美氏などの研究

(b) 可能表現の変遷：渋谷勝己氏などの研究

(c) 条件表現の変遷：阪倉篤義、小林賢次氏などの研究

(d) とりたて表現の変遷：沼田善子氏、野田尚史氏などの研究

これらの表現を選択した理由としては、先行研究が豊富にあることが挙げられる。上に挙げた人名は研究者の一例であるが、彼ら以外にも多くの碩学の論があるので、それらを収集し、考察の対象とする。

なお、(a)から(d)の順序であるが、これは研究を遂行する順序である。(a)と(b)は主に文末表現として出現するために、前年度の文末モダリティ表現の分析と同じ流れで研究を進められると考えたためである。一方、(c)と(d)は、助詞として出現するために、研究を進める順序を後回しにしたのである。

(2) 先行研究に対して、パターン・モデルの適用可能性を検証する。

(1)の各先行研究に対して、パターン・モデルがどの程度適用できるかを検証する。

ただし、一年間で(a)から(d)のすべてを行なうのは非常に困難なので、本年度は(a)(b)(c)の三つに限って研究を進める。ただし、(d)に関する研究文献の収集作業は行なう。

本応募者の設定した四つのパターン・モデルは、形式と形式との関係性から導き出されたものであるが、これらがさらに抽象化できれば、形式と意味との関係性のモデルとしても提示しうる。たとえば、累加型であれば、ある形式の表わす意味が時間の経過と共に累加していくと説明ができ、また漸減型であれば、ある形式の表わす意味が時間の経過と共に減少していくというような形で表わすことができる。本年度は、そ

れがどの程度「依頼表現」や「可能表現」などにも適用が可能であるのか、検証を進める。本研究でのパターン・モデルと先行研究での成果が関連づけられれば、新たな研究方法が開拓される可能性が十分にある。

(3) 先行研究との検証結果の報告書を作成する。

(1)と(2)で得られた検証結果をまとめて、報告書を作成し、発表する。

(4) 前年度同様、文献資料データベースの安定性を高めるべく、資料収集に当たる。

前年度に引き続き、特に明治期から平成までの文献資料を収集し、データベースを充実させると共に、コーパス化も積極的に進める。前年度同様、文学作品の収集を中心に進めるが、適宜エッセイや新聞や雑誌の記事など、多岐にわたる文献資料の整理・入手にも着手し、資料の幅を広げていく。

<平成25年度>

(1) 先行研究に対する、パターン・モデルの適用可能性の検証を継続する。

24年度では行なわなかった(d)「とりたて表現の変遷」について、研究を行なう。前年度同様、とりたて表現の変遷にどの程度パターン・モデルが適用できるのかを検証する。

また、適宜(a)から(c)に関しても、修正・検証を継続的に行なう。

(2) 平成24年度の検証結果を文献資料データベースで検証を行なう。

平成24年度に行なった、日本語表現の変遷に関する先行研究の検証結果を、平成23・24年度で安定性が高められた文献資料データベース(コーパス)を用いて、再検討を行なう。特にパターン・モデルの見地から、どのような統一かつ包括的なモデルが抽出できるのかを検討し、パターン・モデルの安定性および信頼性を高める。

(3) 研究成果の刊行

上述したすべての研究成果をまとめて、「変遷パターン・モデルを用いた日本語表現の分析」(仮)として刊行すべく、準備を行なう。

4. 研究成果

本研究は、日本語史研究の新たな方法論的視点としての「変遷パターン・モデル」を用いて、明治期以降の日本語表現を分析・考察することを目的としている。最終年度の平成25年度の「研究計画」は、1:先行研究に対するパターン・モデルの適用可能性の検証(の継続)、2:文献資料データベース(コーパス)での検証、3:研究成果の刊行の3つであり、過去3年間における本研究のまとめとして位置づけられるものである。

まず1の成果としては、本年度はとりたて表現の変遷を行なう予定であったが、前年度までの依頼表現・可能表現・条件表現の分析と考察が進捗しなかったため、本格的に取りかかることができなかった。しかし、研究遂行に必須となる先行研究や資料等の入手は満足できるものであったので、今後これらを活かし、研究の充実を図る所存である。

2のデータベース(コーパス)での検証も、コーパスの構築がなかなか進められなかったため、これも満足のいく結果は得られていない。

3は、上述のように、研究成果が満足には得られてはいないため、現時点での刊行は困難であるが、筋道は明確になってきているので、近いうちに刊行できるよう鋭意研究を進めていきたい。

なお、本研究での「変遷パターン・モデル」は上述の各種表現を対象とし考察を進めていたが、その過程で特にモダリティ副詞(陳述副詞)が文中で用いられた場合と副詞が一語で用いられた場合(副詞一語文)で意味に差異が生じる現象が見られた。そして、この観点からのアプローチも変遷の様相を反映させたものであるとの考えを得ることができ、それを研究成果として発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

小池康(2014)「一語文での使用から見たモダリティ副詞の意味」『Liberal Arts』22, pp.1-12

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称:

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小池 康 ()

研究者番号：70334018

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：